なぜ英語が話せないの？

会話上達法―第三部―

〈49〉

繰り返し発音練習を

口や舌の動きを学ぼう

「いよいよ英書を読むという時に、長崎から来ていた子供があって、その子供が英語を知っているというので、呼んで来て発音を習うたり（中略）長く彼方へ漂流していた者が着くと、その宿屋に訪ねて聞いたこともある。その時に、英学で一番むずかしいのは発音で（中略）子供でも宜（よろし）ければ漂流人でも構わぬ、そういう者を捜し回っては学んでいました」（福翁自伝）

蘭学や英学を勉強した福沢諭吉は、発音の難しさに直面して、苦労した。現代のように、ヒアリング練習用のカセットテープも洋画もない時代。生きた教師である英米人も少なかった。

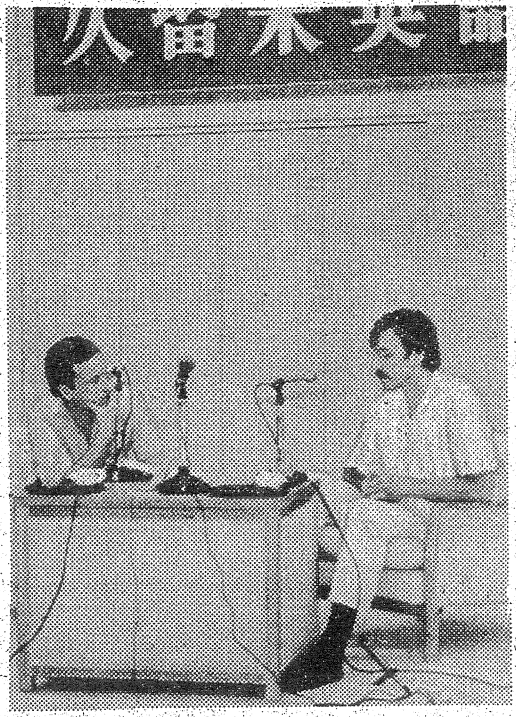
福沢の労苦に比べれば、現代人は恵まれている。外人が教える会話学校もあれば、街角で布教に当たる「末日聖徒イエスキリスト教会」（モルモン教）の宣教師と英語で話すこともできる。テープで何十回と発音を耳にし、口に出す練習も可能である。

ただ、英語の発音には日本語にない音がたくさんあり、下唇を歯でかんだり、舌を前歯で軽くはさんで出す発音があったりで、習得は容易でない。日本語よりはるかに多い母音をもつ朝鮮語を話す韓国人に比べ、日本人のハンディは大きい。ネイティブスピーカーから口の開き方、舌の動きなどを繰り返し指導を受けることが大切である。

米国で生活したり、旅行すると仰天するような発音に出合うことが多い。今では「サンキュー」は「テンキュー」と、英米人らしい発音をする人も増えたが「ローカル・ニュース」は「ローコ・ニュース」、「メトロポリタン」は「メットポリタン」、「ホット」は「ハット」に近い発音なのを聞くと、あわててしまう。ハンバーガーの「マクドナルド」は「ムクダナル」みたいに聞こえ、「ダ」にアクセントがあり「ミルク」は「メルク」のように響く。

米国では一九七三年ごろ、それまで国民に最も親しまれたスポーツ・野球の人気がフットボールに抜かれた。その際、ミシガン州の地方紙のデスクに、米国における野球とフットボールの関係をインタビューしたが「フットボール」の発音が悪く、相手が「ベースボール・アンド・ファット？」（野球と何と言っているんだ）と聞き返す。仕方なくスペルを言うと「オー、ユー・ミーン・フットボール」と大笑いになった。

米英では、日常会話で頻出する単語ほど正確な発音が難しい。異なる母国語をもつ移民同士が築いた米国のこと、少々、発音が悪くても通じるだろうと思うのは、全くの的はずれである。



英会話では正確な発音が大切で
繰り返し練習が必要